

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。(本文中の~~~~~をつけた語句は問11に関わるものである。)

アメリカ資本主義の最盛期ともいえる一九五八年、制度学派の経済学者J・K・ガルブレイスはその名も『ゆたかな社会』という名著を出版した。世界大戦終了直後、社会を覆っていた資本主義の「成熟と停滞」という観念は、その後のアメリカ的繁栄のなかでいつしか過去のものとなり、時のアメリカでは経済成長はすでに「通念」と化していた。同じころ、アメリカは世界の先頭をきつて「高度大衆消費時代」を享受しているのだという、W・W・ロストウの経済成長段階論がもてはやされていた。⑦
ういった成長の宴のまつた⑧なか、ガルブレイスはいち早く通念に挑戦する。「成長」や「ゆたかさ」への重大な懸念を表明する。成長はある種の「有害な傾向」を生み出している、と。

資本主義の、あるいはさらに広くとれば人類史の、古来の病弊はいくつかあるが、決定的には飢餓や貧困であった。戦後中核諸国の高度成長はそれがある程度解決し、ゆたかな富の社会を出現させた。「高度大衆消費時代」の到来である。だが、そういった解決策そのものが実は新しい難題を、つまり新しい病を生み出してしまった、とガルブレイスは批判する。名づけて「依存効果」。その要約的主張を聞いてみよう。

社会がゆたかになるにつれて、欲望を満足させる過程が同時に欲望をつくり出していく程度が次第に大きくなる。これが受動的におこなわれることもある。すなわち、生産の増大に対応する消費の増大は、示唆や見栄を通じて欲望をつくり出すように作用する。高い水準が達成されるとともに期待も大きくなる。あるいはまた、生産者が積極的に、宣伝や販売術によって欲望をつくり出そうとすることもある。このようにして欲望は生産に依存するようになる。(…)欲望は欲望を満足させる過程に依存するということについて今後もふれる機会があると思うので、それを依存効果と呼ぶのが便利であろう。

戦後の大企業体制のもとでは、生産者は消費欲望を満足させるだけでなく、新たな消費欲望そのものを生産している。生産者は消費財をつくって消費者の欲望を充足するだけでなく、それをさらに刺激し増長させている。逆に消費者個人の欲望は、個人自身から生まれるのではなく、企業によって人為的につくられる。個人はつねに新たな消費を追い求めつづけることになる。そのとき、消費者側の世間体や見栄だけでなく、企業側による広告・宣伝や販促活動の役割も大きい。要するに、「欲望を満足させ

る過程が同時に欲望をつくり出していく」のであり、「欲望は欲望を満足させる過程に依存する」のだという。

X

る「ゆたかな社会」とは、このような「有害な傾向」を有しており、新たな持病をかかえこんだのである。

ガルブレイスのこの依存効果論は、同時に、新古典派経済学の「消費者主権」論への批判でもある。消費者が何をどれだけ買うかは消費者の自由意思によるのだから、消費者こそが企業の生産体制を決定するのであり、したがって経済活動の主権者は企業でなく消費者だ、というのが消費者主権論である。独立・自由な消費者の欲望がまずあって、企業がそれに従属して生産するにすぎない、というわけである。ガルブレイスの依存効果論はまさにこれに異論を唱え、消費者の欲望を決定するのはむしろ生産者なのであって、生産者主権論を押し出すものでもあった。それは、ミクロ経済学の完全競争的世界像に反して、少数の力①的大企業が経済を支配するようになった二〇世紀中葉世界の現実を反映するものでもあった。

このようにガルブレイスは、早くも二〇世紀半ばの時点で「ゆたかな社会」②のもつ病理を舌鋒するどくえぐり出していた。モノの豊富はココロの貧困を生み出し、物財のゆたかさは精神のまずしさとセットをなしているのだ、と。

依存効果論によれば、欲望の充足が新たな欲望を生むのだが、その充足に実際に突き進みうるのは、実は社会の中上流階級に限定される。それ以下の大多数の人びとは、新たな欲望が生み出されてもそれを実現する購買力を十分にもたないことが多い。

この場合、新たに生み出された欲望は空回りしてカッ望③となるか、絶望してあきらめるしかなかるう。④それでも、ガルブレイスのいう精神的飢餓は消えない。加えて、モノのゆたかさは、自然環境の破壊（公害、地球温暖化、資源枯カッ）、社会的紐帯⑤の崩壊、そして人間的精神の貧困をもたらししてしまった。つまりは人間のココロのみでなく自然のメグミまでも貧しくしてしまった。付け加えれば、第三世界を犠牲にした「ゆたかさ」でもあった。

しばしば「豊富のなかの貧困」と呼ばれるこの事態については、すでに多くの指摘があるところだ。そのなかから、日本にお

GDP成長によ

ける二つの例を紹介しておこう。偶然の一致か、きわめて象徴的なことに、その二著はバブル景気の絶頂期たる一九八九年に出版されている。つまり、日本がモノ・カネの豊富という意味での「ゆたかな富」の頂点に立った時点で、「ゆたかさ」のあり方を問いなおしているのである。題して『豊かな社会』の貧しさ^②、そして『豊かさとは何か』。

まずは宇沢弘文^{うざわひろふみ}『豊かな社会』の貧しさ^③から。宇沢は水俣病をはじめとする公害問題や自動車社会のもつ問題点への関心から出発して、そこからさらに、たんに自然環境のみならず、社会的インフラストラクチャーや教育・医療などの諸制度の問題へと切り込んでいき、これらを『社会的共通資本』と名づけた。そして、モノが豊富にあふれかえるなか、しかし社会的共通資本がきわめて貧しい現実を前にして、この社会的共通資本は市場や国家によってでなく、関係する職業的専門家によって管理されねばならないという主張へと行きつく。

この本の宇沢は、バブル絶頂期の日本において、公害、国土乱開発、自動車、土地 A、税制、大学、医療、農業などの具体的諸問題を取りあげつつ、「ゆたかさ」について以下のように反省する。

日本が「ゆたか」になったということは、統計的データ、経済的指標をみるかぎり、否定できないことのように思われる。一人当たりの実質国民総生産あるいは国民所得というようなマクロ経済指標をとってみても、また多くの基幹的ないしは先端の産業における生産力、技術水準というようなミクロ経済的条件についてみても、日本経済が世界でもっともすぐれたパフォーマンスを示しているということは明白である。また、人々の消費生活についても、都市の物理的外観をみても、また金融的資産の保有数をもみても、日本が「ゆたかな」国であるということは、一見して明らかであるように思われる。

しかし、ひとたびこのような統計的データ、経済的指標をはなれて、人々の生活の実質的、文化的、人間的側面に目を向けると、日本は決して「ゆたか」な国であるということとはできないように思われる。日本経済を特徴づけるものは、この、経済的パフォーマンスの卓越さと、人間的、文化的な貧困さとの対照、乖離^{かいり}であるといっても、いいすぎではないような条件が存在する。

GDPに示される「ゆたかな富」と裏腹に、人びとの「生活」や「文化」の貧困をウレ^④い、現状をきびしく告発していた宇沢

の姿がここにある。「人間的、文化的」な面を無視して「経済的パフォーマンス」だけで「ゆたかさ」を語ってよいのだろうか。
「経済的パフォーマンスの卓越さ」と「人間的、文化的な貧困さ」との乖離！それは「ゆたかな富」と「ゆたかな生」との乖離とも言いかえられよう。へⅠ

もう一冊、暉峻淑子『豊かさとは何か』も一九八九年の出版である。バブルの絶頂期、モノとカネにあふれ、日米逆転がまことしやかに語られ、日本はいわば「ゆたかさ」の極みを謳歌していた時代に、本書はモノやカネの豊富は本当のゆたかさなのか、と問う。そして暉峻は、福祉、教育、住宅、環境、景観、自由時間、公共性など、人びとがその生涯を安心してゆったりと過ごせるための社会的な生活基盤の貧しさを突いた。ゆたかさはカネやモノにあるのか、それとも生活基盤や助け合いの充実にあるのか。へⅡ

ここでも、「ゆたかな富」と「ゆたかな生」の乖離が告発されている。のちの暉峻は、二〇〇三年に『豊かさの条件』を出版している。二〇二〇年代の今日から振り返れば、一九八〇年代の「金満」ニッポンは土地や株式のA的取引に狂奔し、

B ニューヨークの不動産を買い漁った。そしてやがてそのバブルがはじけて始まった長期停滞は、デフレ、雇用喪失、賃金低下、不安定低賃金労働、消費切り詰め、貧富格差拡大が連鎖する「失われた三〇年」となった。へⅢ

要するに多くの日本人は、モノ・カネに還元できない「ゆたかな生」の面での貧しさが存続したまま、同時にモノ・カネ的な意味でも貧しさに陥ってしまった。「ゆたかな富」の日本は「まずしい富」の日本に一変してしまったのである。かつての「金満」をバブル的Aに走ることなく、生活基盤や福祉や教育を充実するために投資していたならば、今日の日本の風景もずいぶんとちがったものになったことであろう。「ゆたかな富」の日本は「ゆたかな生」を志向しなかったがゆえに、「まずしい富」にして「まずしい生」の日本に転落してしまった。へⅣ

成長は生をゆたかにするか。一人当たりGDPの上昇はウェルビーイングの向上をもたらすか。所得の上昇は幸福（主観的ウェルビーイング）を高めるか。

④ くりかえすが、経済学は貧困と闘うべく、富の増加（と分配）を中心課題として展開され、GDPという概念を得ることに

よって、経済成長をして経済運営の最重要課題へと押し上げた。パイの分け方（分配）を変えるよりも、まずは分配されるべきパイそのものを大きくしようというわけだ。そのパイの増大（つまり成長）の先には本来、人びとの「ゆたかな生」「幸福」がCに想定されていたはずだ。だがしかし、すでにガルブレイスや宇沢、暉峻の議論からも伝わってくるように、成長と幸福とは、あるいは「ゆたかな富」と「ゆたかな生」とは、必ずしも合致しない。そんな予感が漂いはじめてきた。いや、現実となりはじめていた。へV

（山田鋭夫『ゆたかさをどう測るか』。なお、文意を損なわない範囲で若干の省略をおこなっている。）

注 制度学派⇨社会制度のあり方に注目する経済学の学派。

W・W・ロストウ⇨アメリカの経済学者。

新古典派経済学⇨個人の選択と市場のメカニズムを重視する経済学の学派。

ミクロ経済学⇨個人、家計、企業、政府を研究対象とする経済学。

経済的指標⇨経済状況を数値化したもの。GDP・有効求人倍率・消費者物価指数など。

マクロ経済指標⇨国家や地域全体の経済をみるための指標。

ウェルビーイング⇨著者はこの訳語として「ゆたかな生」を本書では使用している。

問1 傍線①～③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号

3にマークせよ。

1	①	カ占	1	カ空	2	惨カ	3	カ麗	4	カ間	5	硬カ
2	②	カツ望	1	カツ仰	2	恐カツ	3	カツ色	4	円カツ	5	カツ藤
3	③	ウレい	1	ユウ予	2	ユウ慮	3	ユウ閉	4	ユウ長	5	ユウ福

1

問2 傍線⑦「そういった成長の宴」とは、どういうことを意味しているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解

答番号 4 にマークせよ。

1 戦後アメリカ社会では経済成長によってようやく飢餓や貧困を克服した社会になり、やがて来るべき高度大衆消費時代に対して人びとは何の疑念も持たないで期待に胸を躍らせているということ。

2 資本主義が停滞を脱して経済成長の段階に入ったことはアメリカ社会の中では実感を持って認識されており、そのなかでアメリカの国民はさらなる発展を夢見て懸命に努力をしている最中であるということ。

3 戦後しばらくしてアメリカでは高度大衆消費時代といわれる段階に入り、その豊かな恩恵を受ける時代がずっと続くことに何の疑いも持たないで、人びとがたがいに喜びをもって受け入れているということ。

4 資本主義はやがて成熟しきってその後は停滞期に入るとされていたが、その観念を打ち破ってアメリカは大きな経済成長を達成するだろうと人びとが希望にあふれた明るい気分に酔いしれているということ。

5 戦後不況のなかで資本主義は成熟しきって停滞期に入ったといわれていたが、ロストウの経済成長段階論によって暗い見通しが払拭されて明るい見通しが示されたことを人びとが歓迎の意を持って受け入れているということ。

問3 傍線⑧「『依存効果』」の説明として適当でないものはどれか。次の中から一つ選び、その番号を解答番号 5 にマークせよ。

1 消費者の欲望が自律的ではなく、企業の広告やマーケティング活動によって喚起される。

2 消費者の欲望は生産の前から存在するのではなく、生産そのものによって作り出される。

3 消費者は自分で何が欲しいのかを意識ができず、広告やマーケティングによって自分の欲望が明確になる。

4 企業はマーケティング戦略で、消費者が何を欲しているかを探るなど、消費者の欲求に依存して生産活動を行う。

5 企業の宣伝を通じて新たな欲望を創出した結果である消費者の選択が自律的ではなく、企業の働きかけに依存している。

問 4

X

には、次に示す①～⑥の六つの文を並び替えたものが入る。後の中から最も適当な並び順を示したものを選び、その番号を解答番号 6 にマークせよ。

- ① その結果、欲望が充足されればされるほど不満足感に襲われる。
- ② こうして「ゆたかな社会」では、物質的貧困に代わって精神的な飢餓が定着することになった。
- ③ それが「ゆたかな社会」の現実だと、ガルブレイスはいう。
- ④ 物的にゆたかになればなるほど、ゆたかさを感じなくなる。
- ⑤ このように「依存効果」によって、欲望は自己増殖していく。
- ⑥ あたかも回転する踏み車トレッドミルのなかで走りつづけるハツカネズミのように、消費者は欲望の無限増殖の罠わなに陥り、購買と消費に駆り立てられていく。

5	4	3	2	1
⑤	③	⑤	③	②
↓	↓	↓	↓	↓
③	⑥	③	⑥	④
↓	↓	↓	↓	↓
⑥	①	④	②	⑥
↓	↓	↓	↓	↓
①	⑤	②	④	①
↓	↓	↓	↓	↓
④	②	⑥	①	③
↓	↓	↓	↓	↓
②	④	①	⑤	⑤

問5 傍線㉔「それでも、ガルブレイスのいう精神的飢餓は消えない」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 7 にマークせよ。

1 購買力を十分に持たない人びとは、欲しいものが手に入らないという物質的貧困に陥ることによってさらに物質的ゆたかさへの欲望を募らせるから。

2 購買力を十分に持たない人びとは、中上流階級の人たちが物質的にゆたかになっていくのを目の当たりにするのでよりいっそう精神的な飢餓感を募らせるから。

3 大量の消費時代においては中上流階級の人もそれ以下の大多数の人びとも、生産者によって作り出される消費欲望をかき立てられて精神的飢餓に陥るのは同様であるから。

4 社会の下層階級の人びとが欲しがる商品が街中にあふれ、それらを中上流階級の人びとが購入することによって物質的にゆたかになっていくのを目の当たりにしているから。

5 高度大衆消費時代には、あたかも大量消費こそが中上流階級の象徴であるかのような風潮が生まれ、購買力を十分に持たない人びとも大量消費にあこがれを抱くようになるから。

問6
 解答番号 A・B・C に入る語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 8 にマークせよ。なお、同じ記号の には同じ語句が入るものとする。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|--------|---|--------------------------|
| 1 | A | 投資 | B | 帰するところ | C | 安穩裏 <small>あんのんり</small> |
| 2 | A | 投機 | B | 拳句のはて | C | 暗黙裏 |
| 3 | A | 騰貴 | B | 詰まるどころ | C | 成功裏 |
| 4 | A | 投資 | B | 拳句のはて | C | 暗々裏 |
| 5 | A | 出資 | B | 詰まるどころ | C | 隠密裏 <small>おんみつり</small> |

問7 へⅠ へⅡ へⅢ へⅣ へⅤ のいずれかに、次の一文が入る。それはどこか。後の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 9 にマークせよ。

二〇二三年の日本の一人当たりGDPは世界のなかで第三四位へと落ちている。

1 へⅠ 2 へⅡ 3 へⅢ 4 へⅣ 5 へⅤ

問8 傍線⑤『ゆたかな富』と『ゆたかな生』の乖離が告発されている」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 10 にマークせよ。

1 物質的ゆたかさと生涯を安心して暮らすことができる充実した生活基盤は、本来は同時に実現しなければならないものであるのに、かけ離れたものになっていることを世の中に訴えかけていること。

2 物質的ゆたかさと精神的なゆたかさは本来は対立するものであるから、物質的ゆたかさを追求する際には人間的・文化的な側面の充実を絶えず念頭に置く必要があると訴えかけているということ。

3 モノとカネが有り余っている少数の人びとがいる一方で、大多数の人びとは人間的・文化的な生活すらままならない状態におかれ、両者がかけ離れた状態になっていることは是正を求めているということ。

4 モノとカネを追求するあまり、人間的・文化的な生活基盤の充実がないがしろにされてしまっている現実を世の中に訴え、物質的ゆたかさばかりに有頂天になっている人びとに対して警告しているということ。

5 統計的なデータや経済的指標ではどの国よりもゆたかであるとされているのに、人びとの日常生活においては依然としてゆたかさを感じられなくて、経済的指標とはかけ離れていることを嘆いているということ。

問9

傍線㊦「経済学は貧困と闘うべく、富の増加（と分配）を中心課題として展開され、GDPという概念を得ることによって、経済成長をして経済運営の最重要課題へと押し上げた」とあるが、この文に表れている筆者の考えはどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 11 にマークせよ。

1 経済学は、本来の目的である貧困の克服と富の増加と分配を課題としていたにもかかわらず、GDPという考え方が採用されて以後は、モノとカネの増加による経済成長ばかりが注目されるようになったことに対して、筆者はGDP至上主義ともいべき学界の風潮に異論を唱えている。

2 経済学は、これまでは貧困の克服のためにモノとカネの増加を主な研究課題としてきたが、GDPという考え方を採り入れて以降、数値的に成長目標が明確になったために経済成長こそが経済学の最も重要な課題であるとされるようになったことに対して、筆者は経済学の発展段階として了解している。

3 経済学は、貧困を克服するためにモノとカネを増やすこととそれらをどのように分けるかを主な研究課題としてきたが、GDPという概念を採り入れてからは経済成長こそが最も重要な課題であるかのように認識されるようになったことに対して、筆者は「ゆたかな生」の側面が見過ごされていたという懸念を抱いている。

4 経済学は、当初経済的な貧困の問題を克服することを研究の中心的な課題としてきたが、高度大衆消費時代の到来や日本をはじめとする各国の経済成長などによってほぼ貧困の克服にめどが立ち、次の課題としてGDPという考え方を重要な成長課題としてきたことに対して、筆者はGDPに重大な欠陥があったと考えている。

5 経済学は、世界から貧困をなくすためにモノとカネを増やし、それをどのように分けるかを課題としてきたが、GDPという考え方を採り入れて以降は、同一の基準での国際的比較検討が数値的に可能になったために経済成長が最重要課題になったことに対して、筆者は富の分配の課題こそが重要ではなかったかと考えている。

問10

傍線㉔「ガルブレイスや宇沢、暉峻の議論」とあるが、ここでは筆者は三人の「議論」に共通している部分を指摘して論を進めている。では、三人の「議論」の違いに着目した説明として最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を

解答番号

12

にマークせよ。

1 ガルブレイスは高度大衆消費時代が生み出す消費者の精神的貧困に対して警鐘を鳴らし、宇沢は物質的ゆたかさの極みにある日本で「社会的共通資本」の未整備を指摘して制度面から様々な提言を行い、暉峻は日本の著しい経済成長のなかにおいて生涯を安心して暮らせる社会的生活基盤の構築の必要性を説いた。

2 ガルブレイスは戦後アメリカの経済成長が著しい時期に、消費者と一部の大企業とが相互に欲望を依存し合っていることを指摘し、宇沢と暉峻はバブル期の日本が世界一の経済的なパフォーマンスを達成したことに比して、人びとの生活基盤の整備が不十分であることを指摘し、精神的な豊かさを重視するように説いた。

3 ガルブレイスは高度大衆消費時代に入ったアメリカでは消費者主権ではなく生産者主権になっていることを解明し、宇沢はバブル期の日本で起きている公害などの社会問題をとりあげて、その解決のために職業的専門家が必要であると考え、暉峻は宇沢と同時代にモノとカネのゆたかさよりも生活基盤や助け合いの充実が重要であると考えた。

4 ガルブレイスはアメリカの高度大衆消費時代到大企業によって消費者の欲望が操られていることを明らかにし、宇沢はバブル期の日本が経済的指標の高さを追求するあまり社会的な援助制度への投資が不十分になっていることを指摘してその解決策を提言し、暉峻は自身の生活実感に基づいて精神的ゆたかさを追求すべきであると主張した。

5 ガルブレイスと暉峻は、それぞれ高度大衆消費時代とバブル絶頂期における人びとの精神的生活に目を向け、大企業体制のもとで企業が人びとの欲望を募らせて精神的な飢餓に追い込んでいることに警鐘を鳴らしているのに対して、宇沢はバブル時代の経済的なパフォーマンスの卓越さを認めつつ、社会的インフラの整備の必要性を説いた。

問11

この文章を授業で読んだNさんは、文章中にカギ括弧（「・『』」）が多く使われていることに気づき、その使われ方について調べた。その結果、カギ括弧の使い方には明確な規則はないが、実際には四／五つに分類されることがわかり、この文章での使用法を次のように五つに分類してノートに整理した。後日、先生から一つだけ分類の用例として適当でないものが混じっていると指摘を受けた。それはどの分類にあるか。次の中から選び、その番号を解答番号13にマークせよ。なお、「本文中の例」は本文中に~~~~で示している。

1 著書名であることを表す『』。

本文中の例Ⅱ『ゆたかな社会』・『豊かな社会』の貧し～

2 実態がその言葉どおりであるか疑問であることを表す「」。

本文中の例Ⅱ「ゆたかな社会」・「ゆたかな生」

3 他の著者の文章からの引用を表す「」。

本文中の例Ⅱ「欲望は欲望を満足させる過程に依存する」・「経済的パフォーマンスの卓越さ」

4 特別な名称や特に注意すべき語句であることを表す「」。

本文中の例Ⅱ「有害な傾向」・「豊富のなかの貧困」

5 学術的な用語を表す「」。

本文中の例Ⅱ「高度大衆消費時代」・「社会的共通資本」

問12

本文の内容に合致するものはどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 14 にマークせよ。

1 ガルブレイスは高度大衆消費時代において、人びとの消費への欲望が際限なく拡大していくことや中上流階級と下層階級とが離反していく様子から、資本主義そのものが新たな病気ともいえる難題を抱え込んだと考えた。

2 アメリカは世界大戦が終わると、すぐにいわゆる戦争特需によってアメリカ的繁栄を迎え、経済成長が「通念」となるようなゆたかな富の社会を実現させた。それには経済学者の唱える経済成長段階論が大きく寄与している。

3 日本はバブルといわれたモノとカネにあふれた時代に生活基盤の充実を成し遂げなかったことが原因になって、バブル崩壊後、経済は成長どころか長期停滞に陥ってしまい、今日にいたるまで賃金低下などの状態が続いている。

4 宇沢はガルブレイスとはほぼ同じ時代に、バブル期の日本経済が統計的データや経済的指標などをあげて世界の中でもトップクラスのゆたかな成長を成し遂げていることを認めつつ、「社会的共通資本」の貧しさについて言及している。

5 ガルブレイス、宇沢、暉峻に共通するのは、高度大衆消費時代やバブル時代における著しい経済成長と人びとの精神的な幸福や、モノとカネの豊富さと「ゆたかな生」とが、必ずしも一致しない現状を訴えているということである。

二 次の文章は、村上春樹の短編小説「パン屋再襲撃」について、臨床心理学者である筆者が考察したものである。なお、この小説では語り手である主人公「僕」の視点から、物語が展開されている。これを読んで問いに答えよ。

〈パン屋襲撃の話を妻に聞かせたことが正しい選択であったのかどうか、僕にはいまもって確信が持てない。〉

短編はこのような文章ではじまる。それに続けてこれが正しいかどうかの議論が少しあり、しばらくして〈僕は何はともあれとにかく妻にパン屋襲撃のことを話してしまった〉ということばがある。

ここでは妻に話してしまったということ自体がクローズアップされている。つまり何か起こったことは、語られることではじめて事実となるからで、語られない限り事実とならない。ここに心理療法で語ることの意味がある。虐待を受けていたこと、辛かったこと、腹が立っていたことは、語られることによってはじめて事実となり、生きたものとなる。事実となるからこそ、そこから新たな展開が生まれてきて、この短編ではパン屋再襲撃に至る。しかし逆に語られることによって、何かが事実として固定されてしまうリスクも出てきて、それが心理療法や人生において妨げになる場合もある。

冒頭の部分で、語り手は妻にパン屋襲撃について話したことが正しいかどうかについて、少し複雑な議論を自分で展開している。そのなかで〈我々は実際には何ひとつとして選択してはいないのだという立場をとる必要がある〉ということばが出てくる。これに少し注目して、デタッチメントとリアリティの関係について考えてみたい。

何かを選択できるためには、主体性がはっきりしていないといけない。よくある選択の例として、職場からお昼ごはんを食べに行くときにどのお店を選び、さらにはそのお店で何を食べるかを選ぶという話がある。われわれ日本人は、主体性がはっきりしないのか、他の人が何を選ぶのかを気にしたり、他の人に合わせたりする傾向が一般的に強いように思われる。それに対して、主体を中心にして対象を明確にして、何かを選び、他のものを選ばない（否定する）というのは、極めて近代意識の特徴である。選択というのは、何かを選ぶというポジの面に注目しがちであるけれども、他のものを選ばないということであり、否定であるというのは重要な視点であろう。へー

哲学者のアガンベンは、「可能性」「不可能性」「必然性」「偶有性」の四つの様式を挙げている。社会学者の大澤真幸の解説も

参照しつつ、それに沿って見ていくと、前近代の世界の特徴は、「必然性」である。つまりコミュニティのなかで、誰と結婚するのか、どの仕事に就くのかなどに関して、必然性があり、それは主体的に選ぶものではなくて、運命や必然に従わないといけない。へⅡへ様式として分類すると、「可能性」が「すること」が「できる」のに対して、「必然性」は、「すること」を「しない」ことが「できない」。それに対してコミュニティから個人が自立した近代意識の特徴は選択することができるという「可能性」である。たとえばアメリカは、ファストフード店から衣料品ショッピングに至るまで、チョイスの文化で成り立っており、その意味で近代意識の極みかもしれない。そして可能性は、不可能性という逆の形態によって補完されている。可能性を求めるけれども、究極的には不可能である、あるいは逆に不可能であるからこそ、可能性を追究するというのは近代意識の欲望の特徴的なところである。

しかし消費文明というのが、主体的にチョイスをしているように実はコマースナルなどで誘導されてある特定のチョイスを強いられていることが明らかになってきたためもあるのか、それに与せず（くみ）に選択しない、選択しないことができるという偶有性というのが生じてくる。これがポストモダンの意識の特徴であろう。つまり何も選ばず、漂い、何にもコミットしないというのは近代意識の否定の後に表れてきたポストモダンの意識であり、またデタッチメントというあり方にも沿っている。へⅢへしかし、孤立して他者とながっていない人が暴力的な出会いや性的な出会いに遭遇するように、デタッチメントはそのままでは終わらず、強烈なりアリティに直面することになる。それがこの短編では堪えがたいほどの空腹感として現れてくる。

へそのとき僕にパン屋襲撃のことを思い出させたのは堪えがたいほどの空腹感であった。時刻は夜中の二時前だった。へ
へそれは理不尽と言っているほどの圧倒的な空腹感だった。へ

しかしこのような強烈なりアリティに直面しながら、二人にはそれに対処する手段がない。へⅣへしかし冷蔵庫の中には食物という名をカンする^①ことのできそうな食物は何ひとつとしてなかった。

なぜかという、二人は結婚したばかりで、まだ様々な準備の最中であった。へ我々はその二週間ほど前に結婚したばかりで、食生活に関する共同認識というものをまだ明確に確立してはいなかった。（中略）その頃僕は法律事務所に勤めており、妻はデ

ザイン・スクールで事務の仕事をしていた。僕は二十八か九のどちらかで（どういわけか結婚した年をどうしても思いだすことができないのだ）、彼女は僕より二年八ヵ月年下だった。」

これはどのように理解すればよいのであろうか。新婚というのは、結婚という一度目の出会いがあっても、まだ本当の出会いやつながりができていない状態であると考えられる。〈V〉結婚しても、まだ相手に心理学的には出会えていない人は多いと思われ、それが心理療法を受けることによって明らかになることはしばしばある。それではこの空腹感に二人はどう対処しようというのか。

「車で外に出て、オールナイトのレストランを探そう」と僕は言った。（中略）

しかし妻はその僕の提案を拒否した。外に出て食事をするのなんて嫌だと彼女は言った。

「夜の十二時を過ぎてから食事をするために外出するなんてどこか間違ってるわ」（中略）

結婚した当初にはありがちなことなのかもしれないが、妻のそのような意見（乃至は^なテーゼ）はある種の啓示のように僕の耳に響いた。

この短編は、夫婦関係の物語としても読める。あるいは新婚のときの心理状態を示している。つまり相手にはまだ出会えていないと同時に、相手や相手の考え方が **A** されている。それは通常の夫婦関係の場合にはのちに **B** されていくのである。（a）語り手は妻の意見に従うのである。

結婚はしているものの何にもコミットしていず、漂っているような語り手を襲ってきた空腹感は、デタッチメントに立ち現れてきたリアリティであり、一つの出会いである。その空腹感は〈レストランで便^②ぎ的に充たされるべきではない特殊な飢餓〉と呼ばれ、さらに語り手は、その「特殊な飢餓」をひとつの映像として提示している。

①僕は小さなボートに乗って静かな洋上に浮かんでいる。②下を見下ろすと、水の中に海底火山の頂上が見える。③海面とその頂上のあいだにはそれほどの距離はないように見えるが、しかし正確なところはわからない。④何故なら水が透明すぎて距離感がつかめないからだ。

これは非常に興味深く、またわかりやすい比喻とも言える。心理学における単純な象徴解釈を適用してみると、海はころ全体、あるいはその深みを含めて無意識と考えられ、

X

は意識とみなすことができる。われわれが意識しているものは、ほんの一部にしか過ぎず、その下には広く、深いころの領域、無意識の領域が広がっている。船で釣りをする夢が見られることがしばしばあるが、それは無意識から何かをつかんで、意識にもたすイメージとして捉えられる。

通常の船やボートは何かの目的地を目指しているが、洋上に浮かぶボートは、方向づけのない意識を示している。これは「何ひとつ選択していない」というあり方に対応していて、語り手の意識をうまく象徴的に示していると考えられる。

海の底というのは、それ以上深いところはなく、無意識やころの深い底を表している。(b) 海底火山には、海底からさらに深いところからマグマが上ってきていて、火山は全く別次元から来る垂直的なパワーを象徴している。ユング派の心理療法において「箱庭」と呼ばれる底を青く塗った砂箱にミニチュアで風景などを作る方法が用いられることがあるが、そこに火山が置かれることも多く、潜在的なエネルギーを象徴していると考えられる。ここでの海底火山は火山でありながら隠れているのが特徴的である。空腹感として襲ってきたセツ羽詰^③まったリアリティは、海底火山のエネルギーとして象徴され、ふだんは姿を見せないものである。これこそが語り手が出会うべきものなのである。

コミットの弱さ、関係の希薄化、デタッチメントなどに関して、われわれは人間関係の次元で考えがちである。(c) コミットの弱さや関係の希薄化は、われわれが何か別次元のものとながっていないからであると考えられる。ユングは、「大きな連関の喪失」ということを指摘する。(d) あの世、神の世界、超越的な世界とながっていないから、現代的に言うなら自分のころの深みとつながっていないから現実的な関係が持てないのである。

その意味で海底火山は、向こう側の世界の現れと考えられる。われわれは水平的に相手につながろうとするが、それとは異なる垂直的な次元とのつながりが実は大切なのである。漂い^④、コミットをせず、相手につながれないのは、海底火山とながっていないからで、それとつながる大切さを、この海底火山のイメージは示している。

「こんなにおながすいたのってはじめてのことだわ」と妻が言った。「こういうのって結婚したと何か関係があるの

かしら？」

海底火山からの垂直的なパワーは飢餓感として現れていて、それは妻と共有されている。妻はさらに、垂直的なものをいわずに水平化し、結婚・夫婦関係と関係づける。

これは精神分析のストラテジーと似ている。精神分析は、クライエントからセラピストに向けられる転移やその反対の逆転移を重視して、いわゆる「無意識」から意識に上ってくる垂直的な衝動などを治療関係に関連づけ、水平化するからである。

(e) クライエントに怒りが生じてきたり、依存欲求が生じてきたりすると、それはセラピストに対して怒っているのであろうか、セラピストに依存したいのであろうか、と治療関係に関連づけ、セラピーの関係のなかで扱えるようにしていくのである。^⑥ 垂直の水平化のようなものは、セラピーでなくとも生じてくる。

ここで語り手は、再び海底火山のイメージに戻り、みぞおちの奥のあたりにぼつかりと空洞が生じてしまうような気分になる。そして〈その奇妙な体内の欠落感——Cという感覚——は高い尖塔せんとうのてっぺんに上ったときに感じる恐怖のしびれにどこかしら似ているような気がした〉。海底火山から高い尖塔が出てきたように、ここで垂直性のメタファーが続いているのが興味深い、ここから転換が生じる。

そのときに語り手は、同じような空腹を経験したことがあるのに気づき、パン屋襲撃をしたことがあるのを思いだし、「パン屋襲撃のときだ」と思わず口にする。これによっていよいよ妻との共有がはじまり、語ることによって話は展開していく。海底火山や空腹感という垂直的なエネルギーは水平方向に向かっていき、妻へと、パン屋襲撃へと向かっていくのである。

(河合俊雄『村上春樹で出会うところ』。なお、文意を損なわない範囲で省略をおこなっている。)

注 アガンベン＝イタリアの美学者、哲学者。

ポストモダン＝近代を超えようとする思想運動。

テーゼ＝基本指針。

ユング＝スイスの心理学者、精神医学者。

ストラテジーⅡ方略。手法。

問 1

傍線①～③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号 15 にマークせよ。

15	①	カンする	1	カン末	2	カン没	3	カン与	4	カン隙	5	カン水
16	②	便ギ	1	時ギ	2	兎ギ	3	討ギ	4	奥ギ	5	巧ギ
17	③	セツ羽	1	セツ操	2	セツ速	3	セツ迫	4	セツ衝	5	セツ盗

問 2

傍線㊦「語られない限り事実とならない」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 18 にマークせよ。

- 1 かりに自分が体験したことであっても、それを一人で抱え込んでいる限り、次の段階には決して進みえないということ。
- 2 自分一人で抱えている事実は、語ることを通して他者と共有しない限り、事実として固定されることがないということ。
- 3 実際に自分の身に起こったことであっても、他者に語ることがない限り、それは起こらなかったことになるということ。
- 4 クライエントが語れない事柄を、セラピストが事実として受け止めてカウンセリングすることなど不可能だということ。
- 5 自分の身に実際に起こったことを本当の話として他者に信じてもらうためには、語るという行為が不可欠だということ。

問3 傍線①「これに少し注目して」とあるが、筆者はなぜ「これに少し注目」するのか。次の中から最も適当なものを選び、

その番号を解答番号 19 にマークせよ。

1 語り手が妻にパン屋襲撃の話を書かせたことはあくまでも偶然の結果であって、必然や運命に導かれた結果ではなかったということ、あらかじめ明示していることばだから。

2 語り手が再び体験することになるパン屋襲撃は、他者の意向に沿って実行されたものであって、語り手には本来その気はなかったということを、あらかじめ明示していることばだから。

3 語り手も妻も、主体性は有しつつも周囲の意見に同調しようと様子見をする、いわば典型的な日本人としての側面を合わせもっていたことが、あらかじめ暗示されているかのようなことばだから。

4 語り手や妻が、あるものを選ばないという可能性を持ち合わせていた一方で、何にもコミットしようとしない人物でもあったからこそ一連の出来事が起こったということを、あらかじめ明示していることばだから。

5 語り手も妻も主体性には乏しいながらも、アメリカに象徴されるような消費文明には全く加担しようとしない、いわゆるポストモダンの典型的な人物であったということが、あらかじめ暗示されているかのようなことばだから。

問4 $\langle I \rangle \langle V \rangle$ のいずれかに、次の一文が入る。それはどこか。後の中から最も適当なものを選び、その番号を

解答番号 20 にマークせよ。

選ばず、漂い、移ろっていくなかで、何のリアリティもない。

- 1 $\langle I \rangle$ 2 $\langle II \rangle$ 3 $\langle III \rangle$ 4 $\langle IV \rangle$ 5 $\langle V \rangle$

問5 傍線㊦「二人にはそれに対処する手段がない」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を

解答番号

21

にマークせよ。

- 1 二人はまだ新婚で、結婚した時期すらも曖昧になるくらい様々な準備に忙殺される日々を過ごしていたから。
- 2 二人は食生活に対する共同認識を十分には確立できず、夫婦でありながら未成熟な関係のままであったから。
- 3 二人は二十代後半で互いに仕事が忙しく、冷蔵庫に十分な食糧を備えるところまで気を回せなかったから。
- 4 二人は結婚しているとはいえ心理学的解釈では距離があり、実際には夫婦と呼べないような関係だったから。
- 5 二人は結婚してまだ間がなく、心理学的な意味での出会いやつながりを未だにもつことができずにいたから。

問6

傍線㊦「この空腹感に二人はどう対処しようというのか」とあるが、筆者は「二人」がどう対処しようとしたと捉えているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 22 にマークせよ。

1 圧倒的な空腹感を語り手も妻もそれぞれが同時に抱いたものの、その空腹を何とかする妙案がなかなか浮かんでこない語り手は、妻の提案にすべて服従し、妻の言うとおりにパン屋を襲撃することによって妻との心の距離を近づけ、それにより空腹に対処しようとしたと捉えている。

2 突如として特殊な飢餓に襲われるという語り手の体験を妻と二人で共有し、その飢餓の原因を結婚と関連付けようとする妻の考えに語り手が従うことで、何にもコミットしない二人が共同で何かを成すことの大切さを認識し、最終的に共にパン屋を襲撃することで、空腹に対処しようとしたと捉えている。

3 語り手は自身を襲った強烈な空腹を妻に語るのみならず、妻も自身を襲った強烈な空腹を語り手に伝えることで空腹感を共有し、それによって互いの心理的な距離を近づけるとともに、語り手がかつて同様の空腹に襲われた際にとったパン屋襲撃という行動も二人の経験として共有し直すことで、空腹に対処しようとしたと捉えている。

4 語り手も妻も同時にそれぞれが強烈な空腹を感じるという体験を共有するのみならず、妻はその原因を結婚に関連付け、語り手は今回と同様の強烈な空腹を過去にも体験したことがあったことを思い出して思わず妻に語ったことにより、二人が少しずつ心理的に接近し、ついに共にパン屋襲撃へと向かうことで、空腹に対処しようとしたと捉えている。

5 語り手を襲った強烈な空腹感と同様の空腹感を妻も抱えるとともに、その空腹感は一時的に満たせるようなものではないという点でも互いの意見を一致させ、どうするかを共に語らいながら思案する中で少しずつ心理的な距離を近づけていき、かつては語り手のみが体験したパン屋襲撃を改めて夫婦で実行に移すことで、空腹に対処しようとしたと捉えている。

問7

A

C

に入る語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号にマークせよ。

23

1 A 相対化 B 絶対化 C 無が存在する

2 A 絶対化 B 相対化 C 不在が実在する

3 A 神格化 B 相対化 C 意味が無化する

4 A 偶像化 B 神格化 C 実存が虚無化する

5 A 神聖化 B 世俗化 C 虚無が具現化する

問8

(a) (e) に入る語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号にマークせよ。

24

1 a ともあれ b だが c とはいえ d 言わば e 結局のところ

2 a ともかく b ところが c しかし d つまり e たとえば

3 a とはいえ b とりわけ c 言うなれば d 要するに e かりに

4 a とにかく b 翻って c と言うのも d すなわち e 実際

5 a とりあえず b たとえば c ところが d 所詮は e もしも

問9

X

せよ。

に入る語句として最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号

25

にマーク

1 火山の頂上

2 静かな洋上

3 透き通った水

4 海面に浮かぶボート

5 小さなボートに乗った僕

問10

傍線㊦「漂い、コミットをせず、相手につながれないのは、海底火山とつながっていないから」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号

26

にマークせよ。

1 自分以外のものに深くコミットできないのは、自分と他者との関係性を垂直方向では捉えようとせず、あくまでも水平方向でのみ捉えようとしてしまっていることに、その原因があるということ。

2 他者との関係をうまく構築できないのは、関係性など水平方向にばかり目を向けており、超越的な世界や自分の心の深みなど垂直方向のつながりを失ってしまっていることに、その原因があるということ。

3 事物や他者との接触がうまくできないのは、接触しようとする側が自分自身にしっかりと向き合えておらず、それゆえに超越的な世界とのつながりも絶たれてしまっていることに、その原因があるということ。

4 事物や他者との間に一定の距離をとってしまうのは、自分という主体を中心にして物事を捉え、あの世や神、自然などといった超越的な世界を否定したり無視したりしてしまっていることに、その原因があるということ。

5 何をも選ばず、ただ漂っているような状態にあるのは、「可能性」や「不可能性」を否定しすぎたあまりに、ユングが指摘する「大きな連関の喪失」という事態にまで陥ってしまっていることに、その原因があるということ。

問11 傍線①「垂直の水平化のようなもの」とあるが、その具体例として最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 27 にマークせよ。

1 志望大学の合格発表日、朝から不安と期待で心が落ち着かなかったが、自分の合格を知ったとたん、驚きと喜びの感情が心の奥底から沸々とわき上がり、気づけば周囲を顧みず快哉かいさいの雄叫びおたけをあげていたこと。

2 遠方にすむ知人に、久しぶりに葉書でも送ってみようと思い立ったものの、いざ文面を書き始めると簡単な漢字すらなかなか思い出せず、そばにいた妻に何度も「あの漢字ってどう書くんだった?」と聞くはめになったこと。

3 幼馴染おきななじみから、「絶対に内密にしてほしい」と打ち明けられた相談内容をうつかり他の人にも話してしまい、しばらくしてそれが幼馴染み本人にもばれ、彼女の心を深く傷つけてしまった自分の愚かさや軽率さを激しく後悔したこと。

4 長らく片思いだった人について告白したもののふられてしまい、しばらく誰とも話せないほど落ち込んでいたが、ある日、気晴らしに友人と遊びに出かけたところ次第に心が軽くなり、ふられたという辛さを忘れることができていたこと。

5 仕事でよいアイデアが浮かばず悩みを抱えた状態で旧友らとの食事会に行き、しばらくは会話を楽しんでいたものの、「ところで仕事は順調?」と問われたとたん、自分への苛立ちが一気に込み上げ、思わず旧友らにそれをぶつけてしまったこと。

問12

本文の内容に合致するものはどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号

28

にマークせよ。

1 デタッチメントに起因する様々な問題を、人はしばしば人間関係という水平的な次元でのみ捉えたり、すぐにカウンセラーに相談したりしがちである。しかし、問題の根本的な解決のためには当人があの世や神の世界を信じ、それによって垂直方向の強烈なりアリティに直面することが何より求められる。

2 短編冒頭における、〈パン屋襲撃の話を書いたことが正しい選択であったのかどうか、僕にはいままって確信が持てない。〉という語り手の言葉について、筆者はそれを正しい選択だったと捉えている。なぜなら、それを妻に語ったことではじめて物語が動き出し、最終的には語り手が、妻と二人でパン屋を襲撃することになったからである。

3 デタッチメントとは、自分たちとは別次元にある超越的なものとのつながりを失っているからこそ生じるものであり、何にも強くコミットしようとはせず、希薄な人間関係しか結ぼうとしない、あるいは結ぶことができない人びとのあり方を指している。そして、そのあり方はポストモダンの意識の特徴である「偶有性」にも沿ったものだといえる。

4 コミュニティから個人が独立しているアメリカは、社会自体がチョイスの文化で成り立っており明白な主体性が求められることから、そこに近代意識の特徴が見てとれる。一方で、日本では個人よりもコミュニティを重視する傾向がより強く、主体性が曖昧でコミットを避ける傾向があるため、そこにポストモダンの意識の特徴を読み取ることができる。

5 主体性とは、何かを選択する際に必要とされるものであり、それは長らく近代意識を特徴づけるものと捉えられてもきた。ところが、消費文明社会における選択の多くが、実際にはコマースシャルなどに誘導された、ある特定の強いられる選択であったことが判明して以降、徐々に選択という行為や主体性そのものを否定しようとする動きが生まれていった。